

## 教育現場における心理臨床家の役割に関する臨床心理学的研究

—不登校に焦点をあてて—

心理臨床学専攻 中村 誠文

### はじめに

一年間に30日以上欠席した不登校児童生徒は、平成13(2001)年度まで増加の一途をたどっていたが、平成14(2002)年度からやや減少をみせている。しかし、不登校問題は現在も大きな問題である。1989年に発足した文部省(当時)の「学校不適応対策調査研究協力者会議」が1990年の中間発表で「登校拒否はどの子にも起こりうるものである」との見解を発表し、この視点から不登校問題をとらえる動きが学校教育現場に広まっていった。不登校がどの子にも起こりうるのであれば、どの教員も不登校児童生徒と関わる可能性があるといえる(網谷ら,2001)。

いじめや不登校など学校生活に不適応を示す児童生徒の増加に対しての対応のひとつとして平成7(1995)年度から始まった文部省(当時)の「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業(以下SC事業)」がある。

今まで、学校教育現場がスクールカウンセラーにどのような支援(役割)を求めているのかという学校教育現場の認識やニーズを調べようという研究は多数あるが、不登校に焦点をあて、不登校児童生徒の支援として教育現場での心理臨床家の役割についての先行研究は少ない。

そこで、本研究では、不登校に焦点をあて、不登校児童生徒への援助として、教員が心理臨床家(スクールカウンセラー)にどのような支援(役割)を求めているのかということをも明らかにしていく必要がある。

### I 研究の目的・仮説

本研究では、まず、第1に現在の教員の不登校に対するとらえ方、不登校児童生徒への関わり方・支援として難しかった点を明らかにする。最

近の傾向として不登校について、さまざまなことがいわれており、一元的なとらえ方はされておらず、教員もそのようにとらえているのではと考える。また、教員の不登校に対する関わり方は、不登校のとらえ方も変化していることから受容・理解のもと、その児童生徒に合わせた支援をしているのではないかということをも仮説とする。

第2に、不登校児童生徒に対して心理臨床家(スクールカウンセラー)にどのような支援(役割)を求めているのかということをも明らかにする。教員が不登校児童生徒に対して心理臨床家(スクールカウンセラー)に求める支援(役割)として、カウンセリングが主となるような専門的な支援が望まれているであろうということをも仮説とする。

第3に、不登校に対するとらえ方によって不登校児童生徒への関わり方・支援として難しかった点は変化すると予想される。心理臨床家(スクールカウンセラー)に求める支援(役割)に関しても、不登校児童生徒の本人の問題としている場合は本人への関わりを求め、家庭の問題としている場合は、家庭・保護者への関わりを求めるといふ、問題としている、されている人への直接的な支援(役割)を求めているのではということをも仮説とする。

### II 研究の方法

1. 調査時期 2006年 6月1日～6月30日
2. 調査対象・手続き

事前アンケート調査(2006年1月)をもとに作成した質問調査紙を鹿児島県の公立小学校、中学校の現職教員330名へ配布、郵送により回収した。330名中151名からの回答を得た(回収率45.8%)。小学校教員(男性13名、女性29名)、中学校教員(男性63名、女性45名)、不明1名であった。年齢構成は、20歳代26名、30歳代64名、40歳代34名、

50歳代17名, 60歳代7名, 無記入2名, 不明1名で, 平均年齢は38.8歳であった。分析は, 不明1名を除外とし150名を対象として分析を行なった。

### 3. 調査内容

教員の不登校のとりえ方, 不登校児童生徒への関わり方・支援として難しかった点について, より実状を把握する為に本調査の前に事前アンケート(2006年1月)を実施した。事前アンケート調査の結果と伊藤・中村(1998)の研究から学校教育活動における具体的な事象(役割)を表す47項目, 中島ら(1997)の研究からスクールカウンセラーに期待する活動, 知識をもとに作成した。

## III 結果と考察

教員の不登校のとりえ方として多くの教員は, 「本人, 家庭, 社会, 学校などの様々な問題の絡み合い」ととらえられており, 部分的には先行研究など, 教員の不登校のとりえ方として一般的にいわれている「対人関係の問題」や「本人・家庭の問題」というとりえ方もされていることが明らかとなった。

不登校児童生徒への支援・関わり難しかった点として, 「登校刺激の与え方とタイミング」を難しいと感じているということが明らかになった。これは, 教員の登校刺激への意識が高く, 教員の登校してもらいたいという願いや教員の役割意識ということも考えられるので, 教員を支援する際, 心理臨床家(スクールカウンセラー)はこのような役割意識を考慮しなければならない。不登校児童生徒を支援する際, 物理的な問題(時間, 人員不足等)が重要であることが再認識された。そして, 教員は不登校児童生徒の受容, 理解はなされているものの, 環境・体制作りや, 不安や情緒的混乱の不登校児童生徒への対応といった具体的な対応やコミュニケーションをとる点で難しさを感じていることがわかった。

不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む支援(役割)として, 全体的に各項目平均値が高くほとんどが望まれているということが明

らかとなった。その中でも「学校・教員との連携」を望んでおり, その次に「教員への支援」と, 不登校児童生徒よりも教員への研修会やコンサルテーションといった支援が望まれていることが明らかになった。興味深いのは, 不登校児童生徒へのカウンセリングを望んでいると思っていたが, 保護者へのカウンセリングをより求めているということが明らかになった。

教員の不登校に対するとりえ方と不登校児童生徒に対して心理臨床家(スクールカウンセラー)にどのような支援(役割)を求めているのかということの関連として, 「本人・家庭の問題」ととらえている教員は, 不登校児童生徒への直接的な専門的な支援を望んでいる傾向にある。「肯定的自己防衛」ととらえている教員は, 教員を対象とした研修会, カウンセリング, コンサルテーションと教員への支援と学校, 教員との連携を望んでいる傾向にある。「対人関係の問題」ととらえている教員は, 学校, 教員との連携を望んでおり, 教員に対しての支援も望んでいる傾向にある。

心理臨床家(スクールカウンセラー)の支援(役割)として, 心理臨床の専門知識は当然であり, それをふまえた上で教員は支援を求めているが, 直接的支援よりも間接的な支援を求められていることが明らかとなった。最も望まれていることは, 「学校・教員との連携」である。教員間, 教員と児童生徒, 教員と保護者など, それぞれとの関係や連携をといった, 心理臨床家の役割としてある「つなぐ」というリエゾン機能を求めていることがいえた。そして, 本研究では, 養護教諭は, 管理職・教員よりも「教員間の連携」が難しいと感じていることが明らかとなった。教員間の連携だけではなく, 養護教諭と他の教員の連携も考えていく必要があることが明らかとなった。スクールカウンセラーとして学校教育現場で活動する際の, キーパーソンのひとりである養護教諭への支援・協働の重要性も再確認された。「連携」ということが不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む支援(役割)として非常に大きいということが示された。